

新輯
近世雜文鈔

特257

450

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始



特 257
450

修文館編輯部編



一世雅文鈔

東京修文館藏版





本居宣長像

緒言

- 一、本書は中等諸學校上級用の副讀本、或は補習科の教材として編纂したものである。
- 一、材料は近世雅文の中文藝の趣味に富み、皇國の醇風美俗として青年の徳性を涵養するに適するものを精選した。
- 一、普通の讀本教材に採られてゐない新しい材料を選んだは、高等諸學校入學試験問題最近の傾向に據つたものである。
- 一、本文を成るべく小段に分けて教授の便を計り、重要な單語を頭註欄に摘出して學習の便に供した。
- 一、原文のまゝを載せて句讀點を施さないのは、生徒をして自ら勞せしめ、國文解釋の根柢を養ふためである。
- 一、固有名詞や詩歌の引用句については頭註として之を略記した。
- 一、練習問題は入學試験問題として最近の出題にかゝるものである。

昭和十二年二月

編者識

新近世雅文鈔

目次

岡部日記

加茂真淵

一	いでたち	一
二	袖が浦	三
三	蒲原の宿	三
四	湖の面	四
五	箱根路	六
六	旅のなぐさ	七
七	比えの山	八

目次

一

目次

八 八 橋 九

九 後の岡部日記 二

うけらが花

加藤 千 蔭

一 序 三

二 ゆるしいろ 六

三 虫の音 七

四 石濱の庵 七

五 山ざと 九

六 さくら 〇

七 手かくわざ 二

八 歌の姿 三

九 わが大人 三

關の驛

本居 太 平

一 都のぼり 三

二 母の面影 四

三 ともなへる人 四

四 せ々の城 六

五 都びと 七

六 茂樹がこと 八

七 寺まうで 九

八 紅葉見に 〇

九 物學びの道 一

一〇 観音の御堂 三

一一 雨と風 三

目次

一二 大井川 三
 一三 名ごり 五

琴後集

村田春海

一 繪と書 七
 二 千本の陰 六
 三 山ざくら 四〇
 四 秋の山ぶみ 四
 五 行かひぶみ 四三
 六 かた絲序 四一
 七 氷をおこせたるに 四七
 八 人にこたふる書 四八

遊京漫録

清水濱臣

一 別れ 五一
 二 心ゆく水 五三
 三 水心亭 五三
 四 三の緒 五三
 五 夏のなごり 五三
 六 心のたゆみ 五三
 七 疊翠軒の記 五七
 八 消息より 五九
 九 馬のはなむけ 五九

玉勝間

本居宣長

一	まことの道	三
二	かなづかひ	六
三	かたゐなかには	五
四	ひいな	六
五	歌よむさま	七
六	ある人の言	九
七	歌を思ふほど	七
八	八景といふ事	七
九	京のやどり	七
一〇	神の道	七
一	山わけ衣	七

菅笠日記

本居宣長

二	いみじき雨風	七
三	はつせ寺	七
四	多武の峯	七
五	一目千本	八
六	吉水院	八
七	かひ坂	八
八	すげのを笠	八

年々随筆

石原正明

一	嵐山	八
二	雪	八
三	長月なかば	八
四	もみぢ	七

五 上野は……………七
 六 夕と朝……………八
 七 言葉の本義……………八
 八 隨筆……………九
 九 櫻のさかりは……………九
 一〇 學の道……………九
 一一 梅の花……………九

藤篋冊子

上田秋成

一 城崎の旅……………九
 二 落葉……………一〇
 三 雨のさまざま……………一〇
 四 年木……………一〇

待問雜記

橘守部

五 初秋……………一〇
 六 中秋……………一〇
 七 聽雪其一……………一一
 八 聽雪其二……………一一
 九 故郷……………一二
 一 世のなりはひ……………一二
 二 人のあるじ……………一三
 三 まらうどは……………一三
 四 今はのきは……………一四
 五 家居は……………一四
 六 歌にまれ……………一五

新近世雅文鈔

新雅文鈔目次 終り

目次	10
七 人の物語	二六
八 消息は	二六
九 心高く見ゆるは	二七
一〇 望事は	二七

〔都〕 京都

○あからさま

○たはやすく

岡部日記

加茂真淵が江戸より郷里遠江に歸りし時の紀行文で、一に東歸りと稱し、年代は詳かでない。紀行文としてよりも途中に於ける地名其他の考證の讀者を利するものが多く、文また莊重の趣があつて、旅のなぐさ、後岡部日記と共に紀行文中の逸品である。

一 いでたち

あはれ都にありつる程はあからさまながら年のはに故郷に歸りなどしければさのみもあらざりしを今はたはやすくも歸るまじく思ひなしつれば千里のをちに老いたるたち

○とみの事

○人やりならぬ

○世のさが

○うつたへに

ねをおきまつりてとみの事ありともいかでかしらんしるともいかでかともみにゆきいたらん今やいかなる事かあらんいかなる心にかますらんなど人やりならぬ胸さわがれつること日ごとにありしを世のさがはあはれなるものにてうつたへに忘るとはあらねども友がきもいで来て高きいやしきゆきかひしけるに二つなき心のまぎれやすくて過ぎぬ

〔後の七月〕

閏七月

○つとめて

○あらまし

此秋はいざなふ人さへあればいでや母をもをがみつま子はらからにも逢はゞやとて後の七月八日つとめてたちいづこのあらましいふころ人々別れをしむとてからやまとの歌ひとも一百ばかりもあらんかしそはことものにしるしつ友がきのなごりなきにしあらねどちぎりおく日數いくばくならねば

まづすゝまるゝ心にはいたしともおもほえず

二 袖が浦

○ゆほびか

〔あをだ〕 復興

〔ときあらひぎぬ〕

解洗衣、萬葉集
「ゆふされば秋
風さむし我妹子
が解洗ごろも行
きてはや着ん」

品川のうまやわたりは海の面ゆほびかなり夜の雨晴れて白雲おほく海の空にかゝれるは伊豆のみ崎と安房の大山となりこの所は袖が浦とぞいふなどあをだかくやこ奴のみだりにいふはをかしきものからいづくにまれときあらひぎぬきん日まではその名ゆかしきやあさかぜいとゞしく身にしむ旅人は衣手さむししばしなほこゝろして吹け浦の秋風

三 蒲原の宿

けふは雲まよひて富士も見えず原の宿すわたりより雨ふら

○夜をかけて

んとす富士川は明日こそわたるべきを水嵩^{みかき}やまさりなむ夜
をかけてだに蒲原の宿までいかでゆかんとて夕つかたより
立ちまよふ雲のあしとともにいそぎつゝ行くに空晴れてお
もはざるに月さやかにいでにけり

夜舟こぐふじの川とに霧はれて高ねにいづる月を見る

かな

夕雲のいざなはざらましかばかゝる所の月はみざらましを
心ありけりなどいひあへりいぬのはじめばかり蒲原の宿に
いたる

○心あり

四 湖の面

○ずさ
○わぶ

つとめて驛をたつ夜の雨に道いとあしくてずさわぶめり

大磯小磯といふわたりはよろぎがいそなるべし夕つけて箱
根山にかゝる關まではくるしとて畑といふ所にやどるいと
はや夜さむなればねもいらぬに瀧の音鹿の聲うちこめたる
山の秋風聞きあかされて立出でぬ

ほのくくと明けゆく山のかひよりかへり見れば朝霧しる
くたちわたれるは海見ん心地す關こゆるほど日さしのぼり
て湖の面見わたさるかなたこなた山をめぐれる水の面は三
巴といふや似つらん蠶叢に擬したる人はたればかりなるや
其後いくそばくの人かのぞみ見けむこの湖にさせる聞えな
きぞあやなき

〔三巴〕

支那蜀

にあり、水曲三
廻巴字に似たる

よりの名

〔蠶叢〕

支那蜀

の地、李白「見
レ説蠶叢路、崎嶇
不レ易レ行」

〔この湖〕

箱根

芦の湖

○あやなき

五 箱根路

○なぞらふ
○によび
○夜をこめて

明けゆくまゝに今日は富士のねに雲のちりもゐらずゆくゆく見むとて馬にてぞ過ぐるいにしへになぞらふる長歌よまんとて馬の上によびつれどねむたさにさだかにもつづけられねば又こそとおもひてなかばにて止みぬ三島にやどりぬ夜をこめて箱根路をのぼる

〔聲きく時ぞ〕
「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の聲きく時ぞ秋はかなしき」

わけ入るまゝに身に入りかへるみ山の秋風鹿の音ながらうち吹くめるを聲きく時ぞとはかゝるをりこそと覺ゆこの山をしも越えばふるさとの空さへ見えじとおもふに更に名残おほゆる明方なりたうげの宿をすぎゆけば杉村のをぐら

○すゞろに

〔ゆはだ〕しほり染

きに霧立ちこめたる袖のしめりもたゞならず古郷のそらさへ見えぬ箱根山こゆる驛のすゞろにぞうき

山々のもみぢはいろくのゆはだをたちまじへたらんが如く世にはそむべくもあらぬ梢ども草の葉さへしぐれあへりいかで旅ならで見ばやとぞおもふ

六 旅のなぐさ

○やむごとなき
○まかりまうし

久しくもなりにけるかな都の誰彼いとむつまじくなりたるにつけておもへどもなほこひしきものは故郷にぞあるいでやあからさまにゆきて來なんとしてやむごとなき御わたりくまかりまうしして卯月の末にたちぬ稻荷の神づか

〔非藏人〕
藏人見習の駈使
に任ずる職

○道ゆきぶり

○なほざり

○よこなまり

○行く手

さなる非藏人なるそのほか一人二人關までとて送る

こたびは道ゆきぶりに見えたらん所々書きつめてやむごとなき御わたりにも奉れかしなほざりならんは何のめづらしき事かあらんふるき名所などのよこなまりいふなどをこわり物したらんやわろからじとあるにげにも古きことは行く手ならでもかうがへつべかめれど旅のなぐさに心ゆかん時書きつけんずるはねぶりさますわざならんとて

七 比えの山

比叡の山は傳教大師のひらかれにたりと人の思へども懐風藻をみればいと早くより寺はありけり日えの社を日よし

〔懷風藻〕

奈良朝の漢詩集
でわが國最初の
詩集

○ことざま

といふはあやまれりふるきふみには日枝と書きたりしかも古はよしをばえしといひて吉の字をばえとよみけるなり

古事記の歌にみえしぬのえしぬとあるを後にはみよしのよしといへり住吉をもふるきものにはすみのえとのみあるを吉の字をよしとのみよみならへる人はいとことざまにやおもはんふるき物を見て知るべしひえの山のふもとにます御神なればひえの神といはんぞことわりなりける

八 八橋

〔八橋〕 三河國
にあり

〔物語〕

こゝは伊勢物語
をさす

物語に八橋のことをいふに水行く川のくもでなれば橋を八つわたせりとあるもいかに心得てかいぶかしとする人も

〔眞字伊勢物語〕

二卷、此書の眞偽作者の如何につきて古來諸説あり

○いかにぞや

なし眞名にかける此物語を見れば水堰川（みづせきがは）の蜘蛛（くまご）手なればとあるを水ゆく川とはよみがたければ水みて川とよめる人もあり堰をみてとよむはさることながらかくつゞけて水みて川といふ例もなく詞の様もいかにぞやおぼゆればよく考へ見るにせとゆと少し字の様の似たるに筆消えなどせばまがひぬべしされば水せく川とよむべし

凡そ川水を堰くは苗代などに引きかけむためなり水行く川をせきたちてそのせきの上つ方にて右左へ四つづゝ八つの溝をなして横ざまに水をやれば蜘蛛の手の四つづゝふたつにて八つあるが如くなればさてこそ水せく川のくもでなればといふなれその川ぞひの道の兩方にあらんには橋も四つ

○かたぐゝに

づゝ八つわたすべしかゝることゐなかにはかたぐゝにあれど一所に八つまでわたしたらんはまためづらしければおのづから所の名ともなりにけんかし

九 後の岡部日記

かくて覺えず日かず經ぬれば東よりもよほしの文しきりなれば二十日あまりに立ちなんとす例の妻子など名残をしむ後の親といふもいと老いたればむねのみふたがりて日をおくる母の御墓にまかりまうしにまうでて心のうちになくくも別れしときをわかれにて別るゝ親のなきぞ

悲しき

とおもひつゞけらるいとしもかなしくえ立ちさるべからね

○むねふたがり

ばやゝ久しくうづくまりをるを日くれぬとずさのいふにか
へり見がちにてさりぬ

練習問題

- (一) 生きとし生けるものの中に人ばかりかしこきものはあれど人みなのかしこければかたみにかしこあらそひをするほどに世の中うつろひかはり心しらひはよこしまにのみなり行くめる (加茂翁家集)
- (二) あしたのけに飽きてゆふべのまけをなさず今日の命を惜みて明日の死をも思ひまうけぬとりけものなか／＼にいにしへいとかはる世なきを見ればかしこめきたる人ぞとりけものには劣れりける (加茂翁家集)
- (三) 物がたりはやあだ／＼しきはさるものから世のありさまのよしあしの見きくにあかぬ事どもを後の代までもつたへまほしとてやよき事のかぎりえらび出てをしへだちたるふみらのみよむ人のあながちにあはめにくむらむこそあひなうさう／＼しけれ

(伊勢物語古意)

うけらが花

加藤千蔭の歌文集で、享和二年七月その門弟數輩の編纂に係るものである。全七卷よりなり、六卷までは和歌を、七卷に文詞として文章がのせてある。文は流麗暢達で、恰も和歌を味ふが如き風致を有してゐる。

一 序

おのが歌をしもみづからえらびて世に残せるためしいにしへ無きにしもあらねどそもきはことなるあたりにこそさることはあらめわがともがらのまねばむはおふけなきわざなれば思ひもかけざりしをおのれすてに年たかくなりた

○きはことなる

○おふけなき

○そゝのかし

ればみづからよくえらびおきてよなどやむごとなきかたが
たよりねもごろにそゝのかしたまふをいなみなむもなかな
かにてえらびいでむこゝろとはなりぬ

〔縣居の大人〕

加茂眞淵

○つばらに

若かりしほどの年経ぬることなればうせにけるを縣居
の大人のつばらにふんで加へたまへる歌に文にいさゝかも
のゝそこより見出だしぬはた身さかりなりしほどはおほや
けの暇なくて書きつむることもせでたゞ一ひらの紙にかい
つけたるなむこゝらみちのくがみの袋に入れおきぬる

○こゝら

○みちのくがみ

○いとなく

一とせある人その歌ども書きあつめむとこふまゝにかの
袋のまゝにてもものしつればその人もつかふるみちにいとな

くていさゝかの暇のほどにうつしかいつめておのれが書け
るをばかしこにとゞめつ後に見ればうつしおとしたるもお
ほかりけり

○こたみ

おのれつかへをしぞきてよりこなたみづからさうしに書
きとめたればこれかれをあはせて數おほかるをこたみ父翁
の集をうつしをへての後かくはえらびいでつるなり

○あげつらふ

されどおのが歌のよしあしを見ること人の歌をあげつら
ふごとくならざればひが歌や多からむと且はおそり且はや
さしみおもふものからたゞかしこくさとしすゝめしたまふ
にしたがへるなりけりかへすくゝも人笑へにやあらむかし

○やさしみ

二 ゆるしいろ

およそ草木の花の天地のなしのまに／＼咲き出づるくさ
／＼の色ありといへど白たへなると紅なるにまされるしも
あらざりけりそが中にもけぢめありて百しほ千入の色こき
はこちたくうたてありてかしこききはのきぬの色めにさへ
かよへばたはぶれにくし

○けぢめ

○こちたく

あらぞめの浅らかなるは下が下のみじかき袖おぼえて品
おくるゝかたになむおもはるゝたゞ梅のゆるしいろなるが
おのづから花びら毎に光こもりてその香さへこよなきにし
くものやはあるべき

○ゆるしいろ

○こよなき

三 虫の音

秋のあはれは虫の音ばかりなるぞなきいで武藏野の原に
しもきゝてむ家づとにもしなむとて葉月廿日ばかり白妙の
袖ふりはへぬば玉の駒なめつゝなむゆきゆくふぐしもたる
をとめに問へばこゝなむ武藏野の原なりといふ

○袖ふりはへ
○ふぐし

この野のさまは人のかたれるよりもげにかぎりなく鳴く
虫の聲は都にて聞きつるよりもいとことにてますらをとお
もへる人々らもえたへぬなげきをなむしける

四 石濱の庵

〔石濱〕 隅田川
のほとりにあり

葉月はつかあまり秋のけはひのなつかしくて例のすみだ
河のほとり石濱のいほりに行きてやどりぬ有明の月のにほ
ひも霧立ちわたる曉のさまも所がら世に似ぬものからこゝ
は雨のそぼ降る日なむ殊にあはれは深かりける

○うつろひて
もとより萱ふけるいほりなれば音だになくて軒のしづく
の三つ四つ落ちそむるより籬の萩の下葉の色付きたるがほ
ろくくと散るもあはれなり水のおもてはうごくともなくて
鏡の如くなるに雲の濃きうすきうつろひてかつ浮びかつ消
ゆる水なわにこそ雨のけはひはしるかりけれ

〔はり原〕
榛の木林

うちむかふ岸のはり原のみ濃き墨がきの如くなるが中に

○をち

柞はその黄ばみたるはさすがにほのかに見えてそのひまびまよ
り長き堤の見えわたるに堤のをちなる梢はやうくくにうす
墨もてかきけちたらむ如くいとしもはるけきはたゞなびか
ぬけぶりとぞ見ゆる

○おのがじし

かくてやゝ夕ぐれ近くなりゆけばむら鳥のおのがじしね
ぐらもとむるに雁の一つら二つらわたり行くなどえもいは
むかたなし暮れはててもなほ行く水の色のみ遠白くのこり
て川添小田にいはへるみくまりの神のみ火の海人のいさり
ともいふべくかすかに見えわたるもあはれなり

○みくまりの神

五 山ざと

五山ざと

○おほんとき

耳になり弾のおとを聞かず目に旗手のなびきをしも見ぬ
おほんときよに逢ひては何事につけても憂しとわびしと怨
みかこつべき事やはあるされば世をさくとしもあらねどあ
きじこる市のちまたに近きにぎは、しさをいとひてこの山
ざとにはうつろひ住めるになむありける

○あきじこる

六 さくら

○ねびまさり

春のけはひもやうくねびまさりて軒近き櫻のひもとき
そめしよりまざる、事なくしづかにうちむかふに八重なる
はあまりにまばゆきまで花やぎてよになつかしきにほひは
似るものなく一重なるはさまおくれたるに似たれどもこま
かに見ればいとらうたげにまめだちてかをりことにふかう

○よに

○らうたげ
○まめだち

○わいだめ

いづれをいづれとわいだめがたくなむ

七 手かくわざ

○まじるし

手かくわざは古へ物のまじるしに出できはじまりたるな
ればよきあしきあげつらふべくもあらぬすぢなるものから
古へ人の書けるあとを見れば心さへ清らにおほゆるはいか
なる故にかと思ふにその古へ人のすなほなる真心のおのづ
からふみでにあらはるゝによりてなりけり

○ふみで

八 歌の姿

春山の花にふれては綾なき衣も其香にそみ秋野の萩をわ
けてはやつる、袖さへその色に匂へりされば上つ世の歌を

○あれいで

うけらが花

三

常に心にしめなばくだれる世にあれ出でたりともおのづからその姿にうつらざらめや

九 わが大人

○いなめ

いその上ふりにし世の事は曇り夜のたどきも知られざりしをいなめの明けゆく如くなれるはわづかに百とせあまりになむありけるしかはあれどなほ物のけぢめ覺束なかりしを朝日子の豊榮昇りて八十の隅路のくまもおちず明らかにしもなりにたるは吾が縣居の大人をはじめとすべし

○くまもおちず

關の驛

本居大平の紀行文である。大平が近江から京都に遊んだ時の物見のさまを書いた小篇で、彼景に人事をとり交せて懐しい書振である。

一 都のぼり

めかり鹽やくあまならねどいとなき世のなりはひにか、づらひていぶせき苦屋のうちに年をへつゝをりくゝの人の物がたるにつけても都の有様ゆかしく又ふることに見ならひたる野山のすがたもいつしかいかでと思ひわたりつるにとしごろむつびかはす人のとみの物することありもろとも

○なりはひ

一 都のぼり

三

に出でたちなんやとさそひつるまゝになん

二 母の面影

こよひ十月十日土山といふ驛になんやどりけるうひ立の
けにやいたくつかれて足のうらうごかれず風のこゝちさへ
みだれがはしうてとばかりうつぶしゐたるほどに母なる人
の面影ゆめにはあらでふと見え給へる何ばかり日數ふべき
わかれぢにもあらねど心になふ物にしあらねば立ち出で
むとせし曉にはたゞならずこそおもほしげなりしかこよひ
のやどり思ひおこせ給ふらんかしと悲し

三 ともなへる人

○たゞならず
○思ひおこせ

○あない
○たどくし

このともなへるは西村の信廣とて京に年経たる人にてか
しこのあないたどくしからずそこはとありかしこはかゝ
りなど所々のけうあることゝもゆくくかたるをきくもあ
しかろむこゝちす

されど冬ごもりのころにて大かたにぎはゝしからず春夏
のほどいかで御らんぜさせばやなどもいふめりたれもさは
思ひつかし道をゆけど日みじかく夜なくは又さむくなど
して旅ゆくにびんなきころなり三月のころにもやなど思ひ
しかどかならずさるをりしもさりがたきさはりはいでまう
てくる世なりと思ひおこしてなん

○びんなし
○さりがたき

四 ぜいの城

〔せい〕 膳所
近江國にあり

○いみじ

○おどろくし

○おびえまどふ

ぜいの城といふを見つゝゆくほどみどりなる海の面には
るかに黒きものゝかずもしらずみゆるかれは何ぞ鴨にこそ
侍るいといみじうもとてやゝあはひ近くなりたればみなと
び立ちたる羽音よいとおどろくしう空さへとゞろきてか
の平家のいくさどもの富士のすそのに陣どりたる夜そゝや
かたきこそよせたれとておびえまどひけんもかうやうにぞ
ありけんと思ひあはさる

松本といふ所におりぬかの三井寺は山のほどいと廣うし
めたればまうづる所々おほかり海みやらるゝ所より見やり

○よの常

たるけしきあないみじともよの常なり目もはるくゝ残るく
まなき水の上に船どものそこかしこゐたる手にとりつべう
おほゆるもをかし

五 都びと

○まらうど

京にいりぬるいかゝはうれしからざらむたそがれの程萬
里小路にしれる人のもとへたづねつきて心おちるぬあす故
郷へたよりありとて燈火のもとに文かきゐたるほどに伊勢
のまらうどやおはするととひ來たる都人のことばながらい
つしかと待ち思ふ人のこゑときゝなしつればやがてよびい
れたり

○かたみに

○ゆゝし

まづ平らかにおはしましたること國なる人々もことなる
ことなくやおはするなどいふにかたみにいとうれしきこと
ふたつなしかゝるにつけてもまづうち出まほしき事もあれ
とゆゝしうてやみぬ

六 茂樹がこと

〔茂樹〕

太平の弟

○このかみ

○さがなし

○さいなまれ

年ごろの事などかたりあはするほどにいぬの時にもなり
ぬわれは五つばかりこのかみなりけれどいとさがなくかた
みにいさかひつゝ常におやなどにさいなまれしを過ぎしい
つとせばかりがほどよりをぢのもとに子になりていきけれ
ば同じ家でありしほどこそありけれいとかなしう思ひかは
しけるを又ほどなく京にもものせしかばいよゝゝこひしう何

○あこ

○かたへ

くれのをりごとにまづ思ひ出らるゝを母などはましてそこ
だに近きほどにのぼりてあこが物すらんありさまをいかで
家つとになどなんの給ひければこのたびの物見もかたへは
そのほいになんありける

七 寺まうで

○大とこ

○あやめ

○はやりか

本能寺妙満寺などいふなる寺々へまうでぬ日蓮上人とま
うすわが宗の祖師の御忌月なればみあかしひるよりもあか
くともしつらねてこゝらの大とこたちかしらさしつどへ物
のわきかへるやうにもじのあやめもわかずはやりかにもは
やりかにきやうをよみあたる

○みじろぐ

御堂のおまへ所もなく立ちこみいさゝかみじろぐことも
かたき中にもあの世を思ふ心はさわがぬにや老いたるもさ
らぬもすゞの音高うあなたふと、涙をさへおとしつゝをが
みいりてをりこよひはげにいたくつかれてありければとく
かへりぬ

八 紅葉見

○はえあり
○よしめく

通天橋といふ所の紅葉この頃さかりなりときゝて見にま
かりぬげに紅葉もことにおほくていと色こくにほへる中に
きなるもまじれるは錦おぼえて中々にはえありまぢかき下
陰をゆくほどはかほにもかゞやくこゝちすその日はことに
人々おほく見にくる日にてよしめきたる女どもの橋のうへ

○めづらか

にもたちさまよひ木本にむれ居たるすゞろにをかしうちり
ばめる旅の衣の袖もうちはらはるゝこゝちす紅葉をこそ見
にきつるに様はづかしうあらそひそめたる袖のくれなゐど
もゝる中びたる目にはいとめづらかなる見物なりけり

九 物學びの道

○ざえ
○はしたなし
○たゆたひ

物學びの道に心ざしそめてはやう／＼年ごろといふばか
りになりぬれど何事もまだたど／＼しうてざえありといふ
人にたいめせんことなまはしたなくまして田舎人はよろづ
つゝましくていかにせましとたゆたひながら立ちよりしを
思ひしにもにずいとうちとけやすくありしかばかく來つる
なりけり

○むとく
○とうで

本居のうしのことなどはるゝまゝにかたりいづ又日ご
ろよみおきつるこゝかしこの歌など見すちかきよのふりな
るはむとくなりと思ひてとゞめつ物せさせ給へるめづらし
きや侍るひとつふたつ見せ給へとこひたれば友だちよみか
はされしをなんとうでられける

一〇 観音の御堂

〔観音〕
萬福寺
○わりなく
○ねんじて
○ひたぶるに
○こやす

観音の御堂にまゐるいさゝかのぼる石の階もいとわりな
くおぼゆるをねんじてのぼるものは階のなかばよりほとほ
とよろほひたふれぬべうなんおぼゆるひたぶるにさもたふ
れてましかばこやせるたびびととあはれかけん人もありや

しなまし

○くれ
○かごか
○つきくし

御だらたてかふるほどにてかりそめなる所におはします
くれざい木どもこゝらつみおきかたはらにけづりなどもし
つゝをり大かたはいとかごかに世をのがれすむにもつきづ
きしうよろしき山寺なりけり

一一 雨と風

夕つかたより又雨ふりいでゝ歸さの道いとわびしう物の
はえなしましたの日も降りくらしつ雨のふる日はわびしき物
なりけり何ばかり海山をへだてたる旅にもあらず日かずは
たつもるといふばかりもあらねど人のもとよりはかなきも

のかりきて寫しもし見もするにぞすこしなぐさめける

○そや

そやもやゝ過ぎゆくほどより西風あらゝかにおこりて時
のまに星の光きら／＼と吹きはらひたるうれしともさらな
りもろともに手をうちてぞよろこびあへるてけの事はよに
はかりがたきものなりけり露ばかりこよひのほどにかゝら
んとやは思ひしかゝるをりの風ばかり心ゆくものはあらじ

○てけ

○心ゆく

一二 大井川

法輪寺にまうでて川づらに出たるは大井川なりはるかに
橋をなんわたせりける渡りもはてでなかばのほどより見わ
たす川かみのかたにこぶかく見ゆるは嵐山とぞきく小倉の

○おほえ

山もおなじさまにてあり宇治の川づらにいとようおほえた
り

○たゝすまひ
○おほどか

むかひの森のしげみにいとあかくにほへる梢みゆ歌もよ
まゝほしけれどさしあたりてはなか／＼何事も口さへうご
かでなんかゝるけしきは繪にかくとも筆およぶまじうこそ
川のながれゆたかに山のたゝすまひもおほどかに世にすぐ
れてをかしうもあはれにも涙さへとどめがたくおほゆるや
げにこそ昔より御幸などもたび／＼ありていみじういひた
りけれ

一三 名どり

あすたゝんとての日はさすがに人々多くとぶらひ來めり
 物まなびやなにやとむつましき人々ものぼりゐたれば日ご
 ろたづねかはしけるに今かへるべきよしいひたればおやは
 らからのもとへふみのたよりならでつてまほしきことなど
 もあればなるべし

○つてまほし

○たいめ
 ○あへなん
 ○さうぐし

○さしぐまれ

こゝとかしことは何ばかりへだゝりたるせかいにもあら
 ず思ひたちなばいつにてもたいめせんことはあへなんなお
 もほしそなどいひていなせたる名残さうぐしう燈火のみ
 うちまもるさかしうはいひつるものからともすれば思はず
 にえさらぬさまたげなどいできつゝ身を心ともせぬ世なれ
 ばさはいへどたびぐしのぼらんことはかたかべいことをと
 心よわくさしぐまれつ

琴後集

村田春海の歌文集で十五卷からなる。春海は漢學の造詣が深く文に唐宋家の風致があつた。その文が純乎たる古雅言を用ひて而も雄大豪宕な漢文の美點を捉へ得たことはその最大特色とも稱すべきか。

一 繪と書

うつせみの世に人のことわざ多かめれどしづけき窓のう
 ち幽かなる燈火のもとにひとり居てよくつれぐなぐさむ
 べきものはたゞ繪と書との二つになむありける糸竹のしら
 べに思ひをやり盃を取りてうき世のさまを忘るるたぐひは

○つれぐ

○思をやり

折にふれ時にしたがひて人の心をなむなぐさむる業なれど
いかでかは常にしもなすべき

○くだれる世

くだれる世に生れ出でて上つ世の人を心の友となすべき
は書なり足は都のうちにのみ止りて人の國の遙かなる境を
もたゞに見るべきものはうつし繪のたくみになむありける
かゝれば古の書どもくりかへし見るいとまには名だゝる山
河のけはひをうつし繪にしのみ出でてこを常に心やりぐさ
とぞなしける

○名だゝる

○心やりぐさ

二 千本の陰

頃は二月の十日あまりなるに岡への雪はなほきえのこり

〔人く〕 鶯の啼
聲に人來を掛く
古來の慣用法

ながらうちかすむ森の梢どもは春の光うちわたりてそこは
かとなく聞ゆる鶯の聲も人くといふにはあらで我を呼ぶな
るこゝちのすめるはこゝろゆく夕べなり

○ことそぎ

所は東の比えのふもとなれば世ばなれてかごかに住ひな
したり松のとほそ萱の軒どもいとことそぎたるにおのづか
らなる竹むらをまがきに結ひわたして堰きいるゝ水の流の
いさぎよく石のたゞずまひことさらならずして庭のつらい
と廣らなるに植ゑそへたる千本の陰は色に香にとりなべて
露をねたみ霞にきほへるけはひこの世のものとしもおぼえ
ずなむあるかくてこそうき世をそむきはてぬるかひありけ
れとて人々めでくつがへりつゝ花のもとにまとるす

○めでくつがへ
り

○まとる

三 山ざくら

〔散り散らず〕
 散り散らず聞か
 まほしきを故郷
 の花見て歸る人
 と逢はなむ（拾
 遺集）

〔鶯に〕
 鶯に身をあひか
 へば散るまでも
 我物にして花は
 見てまし（後選
 集）

○おぼつかなく

一夜のたびねは猶あかぬものから散り散らずとかまつら
 む人もあめればけふはたちかへらむとするを花のたよりな
 らでは又かゝる人めをも見じなどあるじは止めまほしげな
 れど鶯に身をあひかへばとてわかれにけり紫だちたる空の
 けはひうちくもりて昨日はくまなく見わたされし梢どもも
 霞のまよひおぼつかなくなかゝにふりすてがたきあした
 なり

○いちじるく

やゝおり来るまゝに山ぎはあかり行きてやうくさしの
 ぼる日影に見やれば小柴垣萱が軒端はそこといちじるくま

○はだれ
 ○心づくし

して立ちならぶ梢の雪はいよゝ手にとるばかりなればたゞ
 かへり見がちなるに風すこしうち吹きてそこはかとなく散
 り來なるが見るがうちに道もはだれになりもて行けばあな
 心づくしの山ざくらよとて人々おりぬ
 ふりすてし人をとゞむる山櫻散るをも花のなさけとぞ
 見る

四 秋の山ぶみ

〔法輪〕 嵯峨渡
 月橋の南嵐山の
 東部にあり、眞
 言宗

都の旅居も久しうほどふるまゝにおのづから住みなるゝ
 こゝちのせられて今はむつまじう語らふ人々もおほかるが
 中に年比こゝろあひたる法師の法輪にあるがもとより秋も
 はやのこりすくならなりにて侍り山かたづけけるあたりは露

○心おそし

霜の色もくまなく侍るをあな心おそき主かなとそゝのかさ
れて時雨の雲とともにさそはれ行けばあるじは待ちに待ち
たるけはひしるくて御堂のひさしかきはらひてこゝにしば
しやすらひ給へまづ山ぶみのまうけせむとてわりごなにく
れの物などとう出てのゝしりあへり

○わりご

○かゝづらふ

いかでさはあわたゞしうは物し給うぞ世にかゝづらふ事
もなき身にし侍れば一日二日はなほこゝにありて高嶺の秋
のにほひも心しづかにたづね侍らめといへばうたてさはの
たまひそ山の名のあらしはたゞ時のまもうしろめたきをあ
へなく夜の錦になしはて侍らばいかにくちをしからましい
ざたまへとて伴ひいづ

○うたて

○うしろめたし

○いざたまへ

○しほち

しほちの年まだ二十にはたらぬばかりなる一人はしたな
る程のわらはにかの調じたるものなどになはせたりけふは
常の道にもよらじたゞ木末の色をのみしるべとせむとて木
こりあげまきがふみ分けたる跡をたづねてした照るかげを
したひ行けば所せき木の根いはかどなどのいと歩み苦しき
をからうじて少し平らかなるかたそばにいでぬ

五行かひぶみ

人のことわざ多かる中にしなわかるゝものは手かく業に
なむ有りけるそがなかにまづうち見てけぢめいちじるしき
ものはゆきかひぶみの書きざまなりけりはかなき筆のすさ

○筆のすさみ

○けじめ

○かたそば

○あげまき

○あて
○つゝまし

みにあやしくもあてにもいやしくも見ゆめるものにしあれ
ばいとつゝましきわざなりや

○かどありがほ
○あはつけく

さはたあまれるも足らぬもその心の浅きと深きとにより
てしもぞことなるさるはあまり心をこめてこと葉のかみし
もひとしくよみ出でたる歌をもわざとはなち書きたらむは
なか／＼に見おとりするわざになむあるべきそもはたおの
がかどありがほにてあはつけくはしり書きしたるもかへり
て心おくれてこそ見め

○まんながち

あるかなきかに消え／＼なるはおぼつかなくとも止みぬ
べきを文字づよにまんながちならむこそ女のともには似げ

○いたり
○心のみやび

なきわざなれたゞいたり深ききは人はおのづから心のみ
やびより出でて筆のまに／＼捨て書いたるにもなほ見どこ
ろ多かめる

六 かた糸序

あるやむごとなきお前に歌の事などまうしけるにてにを
はのとゝのへはいかゞ心得べきと宣ふめればそは伊勢の國
人がものせること葉の玉の緒こそよけれこれにそのゆゑよ
しはつくせりとてひも鏡一卷を添へて奉りしにお前に宣は
すらく初學のたど／＼しき心にはなか／＼におもひまどひ
てその糸すちをしも得わきがたくなむなほかゝらで幼心の
人にもとく心得べからむよしあらば記し奉れよと宣へり

〔伊勢の國人〕
本居宣長
〔ひも鏡〕本居
宣長著の假名遣
書

○耳うとからず

○おもと人

そはいかゞし侍らむかくまでくはしくとき記せしものを
心をだに深めて見給はばなどか思ひわき給はざらむと聞ゆ
れどなほ耳うとからず教へよとせめ給ふに詮方なくてさら
ば糸口を引きかへて見て参らすべしとて何くれと書きつど
へておもと人まで参らせしなり

○くまなく

こはまたくかの玉の緒のかた端なれば名をばかた糸とな
づけぬこを見給ひて事の心大かたに思ひわき給はゞ更にか
の玉の緒に記せることわりもくまなく思ひとり給ふべけれ
ば今は例少く耳遠きたぐひをばすべともとつぶみにゆづり
て皆はぶけりたゞ口ならし給はん料にとてなすわざになむ

七 氷をおこせたるに

土さへさくとかいふなるは暮まつ程もいと待ちどほなる
にをりしもやむごとなきあたりよりわかち給へるなりとて
暑さわすれむ料にとて賜はれるはいとめづらかになむまづ
手にとり侍るだにそゞろ寒きまでおほえ侍りわらはどもは
めでくつがへり侍りてひたひにのせむねにあてなどしつゝ
もて興じ侍るもをかしうなむ

○いぶせき
○心やりぐさ
○とまれかくま
れ

されどこはおほやけのおものにもそなへ侍ると聞くなる
をかくいぶせきふせやの心やりぐさになし侍らむはなかな
かにかしこきわざなりやとまれかくまれ御まのあたりにこ

そよろこびは聞えつべけれ

八 人にこたふる書

○ふりはへて
○ものよりもけ
に
○なべて

○ゆくりなく
「なにか春
の」源氏物語幻
の巻に「わが宿
は花もてはやす
人もなし何にか
春の尋ね來つら
ん」

ふりくらし侍る此頃の空をばいかにながめたまふにかと
日ごと思ひまゐらせしをふりはへていとこまやかにしめし
給はるこそものよりもけにおぼえ侍れさるは家とじの君の
おもほえず梢の花より先だち給へるよなべて世の春雨をも
御袖にのみとや思ひとり給ふらむさるなげきにしづみ給ふ
とも知らでとひなぐさめをだにしまゐらせて過ぎ侍りしぞ
いとわりなき

紫の物語六卷かへし給へるをゆくりなくうちひらき侍れ
ばまぼろしの巻にてなにか春のと侍るを見侍るにもうち

○うちつけに

○まだき

つけに御うへこそかなしう思ひやられ侍れさるはさかりな
る頃とも知らずとのたまふはいひ知らぬわざになむ
あく世なくちぎりし花よいかなればまだきも風にまか
せはてけむ

○ぬりごめ

さてかのあだし巻々をも御つかひにまゐらすべきをちか
き頃火のさわぎにて書どもみなぬりごめにおし入れ侍れば
とみにはえ見わきかね侍りかさねてこなたよりこそまゐら
せ侍らめ御返りなほこまやかに聞え侍るべきを今日はやむ
ごとなきあたりへまゐるべきちぎりの侍りて今しもたち出
で侍ればこともつくし侍らずなむあなかしこ

練習問題

(四) 花は春を待ちてかをり紅葉は秋を待てにほへり人ばかり己が心のまゝなるものやはある霞をあはれびては暮れゆく春ををしみ露をかなしみては過ぐめる秋をなげくさらばまた年くれむとしてはうらゝかなる春をこそ待つべきに年なみのたちかへらぬをわびてせきとゞめまほしく思ふはなぞ (千歳遺文)

(五) そもく古と今と手ぶりのうつりもて行く如くことばもはた古と今とはことことなることも多かれどももの知れば知といふものほどくくに大きになれば變りゆくものなれば今の事をいにしへぶりに書かむはいと難きことにして石の上ふりにし書らよく見わたしてわがものとせざればかくはなし難きわざぞかし (都のてぶり序)

(六) 静かなる庵かきはらひて庭の草木石などよしありてしなして松のなみたてる音たてて思ふどち訪ひ來たらんに茶點じてすゝめわれも飲みなどせむはいと心ゆくわざにて文人歌よみなどのもてあそばむにはいとつきづきしうおもほゆ (春海、不問語)

遊京漫録

清水濱臣の隨筆で上下二卷よりなる。濱臣が文政三年

二月京都へ上つた時の記事で、前半は日記、後半は旅中の

見聞を輯録したものである。

一 別 れ

おのれよはひ四十に過ぎて四とせ五歳そこと衰へたる事こそあらね身にいたづくところ無きにしもあらねばかくてまた五年十年かさねゆかば老いのさかさひなましと思ひて此の春はあながちに思ひたちぬるになんありける

○いたづく

○あながちに

○うまのはなむ
け

もとより年ごとに十日廿日の旅ゆき二たび三たびと思ひ
たゝぬ年もなしその折ごとにまれくうまのはなむけとて
歌よみおこす人どもあれどあながちに人をつどへて別れを
しむ事なかりき

○こたび

こたびはおのれ思ふところありて陸月の廿日一日をその
日とさだめて行くわれもわかれを惜みとゞまる友も別れを
惜むつどひすその日のありさま人々の歌どもなほこともの
にくはしく記すべしおのが歌

言の葉の匂はぬ身にもおふけなく吉野の花をわけんと
ぞ思ふ

二 心ゆく水

あはれ水ばかりをかしく心ゆくものはあらじかしいかば
かり岡山のたゞずまひおもむきある所なりともいさゝかの
流そはざらましかばことたらぬ心地すべしさはいへ濁りゐ
のきたなげなるは心もうつらずあら浪の恐ろしからんも又
なつかしからじたゞ深さはつるはぎにして渡るべくとこな
めはしりて底の水草さやかにひれふる魚の數よむばかりな
らん流をぞをかしく心ゆくとはいふべき

三 水心亭

こゝに水にのぞみてかたの如き四阿をいとなめるあり廣

〔つるはぎ〕鶴
歴
○とこなめ
○數よむ

○もろこしざえ

さ方丈に過ぎずして更にわづらはしき調度もまうけずある
じはもろこしざえにさとりかしこき翁なるかはやくよりこ
のうまや路に住みてふかくこの流をめでつゝ、近き頃四阿を
いとなみたてみづから水心亭と名づけて春秋の心やり所と
せられにけりげに心の水すましぬべき流のさまなりけり

○とめ來

おのれも十年あまりの昔この清水を見初めてあはれをか
しの流やと心にしみて覚えしを今年ふたゝびこの流をとめ
來てはじめてこのあづまやにあそぶいかでもだしもあらん
すなはちうたへらく

○もだし

世の塵をよそに流してゆく水に心をすますおばしまの
もと

○おばしま

四 三の緒

○あやにく

湖の月見んとて大津の水際なる遠帆樓に宿りけるあやに
くなる雲のたゞずまひに月の影さし出づくもあらず興た
がひてとかくするほどに友だち二人三人とひ來て盃めぐら
すに心ゆきぬるにいづくよりにかあらんみめよきをとめど
も三人四人出で來て三の緒かきならし舞ひうたふに心うか
れて物の音に思ひははれぬ

○みめよき

五 夏のなごり

土さへさくる心地したるほどはことわりの暑さに思ひな
してさまでも覚えざりしを御祓川に流しやりつるやうに思

○心のたゆみ

ひ捨てたる夏のなごり又もたちかへりて昨日今日となりてはなかくに堪へがたく覺ゆるよあやしくさるべきことどもあらねさるは庭のさまを見るにもしなえよらるゝばかりの日影ともなく袖ふく風も身にしみ初めぬるにいかなればかく覺ゆるにはあらん思ふに心のたゆみにこそありけれ

六 心のたゆみ

○心のすゝみ

心のたゆみばかりくちをしき物はあらじよろづ學の道もしかこそはあれ初學のほどはいかでと思ふ心のすゝみより宵曉につとめ勵みて文机にむかひても春の日を短う秋の夜を長からぬやうにのみ覺ゆるをいさゝか物の心しり得て後はいつとなく怠りゆくならひより書をひらきては見るに物

○いとどしく

うく筆とりては書くに心つかれてはてゝは文机の上にくつぶしかゝるめりいとくちをしき事ならずや

残るあつさの堪へがたきはかくていつまでかあらん心たゆみもさてあるべしまなびの道のおこたりは年毎にいとどしくなりまさりなんと思ふからにわれと心に誠めまほしくこそ

七 疊翠軒の記

〔疊翠軒〕三島の旅屋福島貞藏が家號

○かくみ
○とりよろふ

窓より右に富士あしたかを望み箱根を見はるかせりその山々はや五百重山かくみ千重山とりよろふ麓は驛路にて行きかふ人絶えずにぎはひ旅屋軒をつらねたりあるがなかに

○したゝかに
○みやびを

福島といふ家のあるじいさゝか言の葉の道に思ひをよせて
心だましひしたゝかにまめくしき主なりければ都路を行
きかふみやびをたちたえまなく此の家にやどりぬ

○ゆゑよし

いで都より東へかよふ旅にして山路けはしくはたおもし
ろきは玉くしげ箱根の峯つゞきなりけりそのこなたは三島
の宿とて御社の森かうくしく春は霞の衣をきそへ秋は霧
のとばりをかけて花のあや紅葉の錦をいろどり重ね夏は緑
すべていはんかたなくをかしかり此の家のよび名を翠を疊
む軒端といふまことゆゑよしあるかな
遠近につゞく高山みじか山幾重たゝめる翠なるらん

八 消息より

○むつがたり
○物かは

さいつ頃は鄙の長路にやつれたる旅姿をもうとみ給はで
へだてなくむつがたり聞えさせしことだにあるを御歌のか
ずく書きて賜へることうれしとは物かはつゝみあまる心
地なんし侍りつる別れ聞えて後難波に十日あまり侍りて明
日は衣かふべき日といふにやうく都へはのぼりつき侍り
ぬさていさゝか心地そこなひてとかくつくろふ程今日々々
と過ぐいて御返り事怠りたるなめげさはさるかたに見ゆる
し給ひてよかし

○なめげさ

九 馬のはなむけ

八 消息より

九 馬のはなむけ

〔大城のもと〕
江戸

殿へ仕へて大城のもとに参りけるごとにまづ御許をとぶ
らひていにしへ今のこたら語らひつゝうらなく睦ばひつる
ことを今數ふれば十年まりさきつ方の事になんありける仕
へをしぞきつる後はふりはへてもえ訪ひ侍らで雲井のをち
に戀ひわたりしを二月の末つかた上りおはしてより互に訪
ひかはして朝夕になれむつび参らせしかば年頃いぶかしく
思ひわたりし書ををぢく問ひきゝ参らせあるは花にとも
なひてみやびの筵に伴はれありしよりけに親しく交らひ参
らせていとたのもしく思ひ聞え侍るをかねて心ざし給へる
都はさらなり古りにし奈良の都のあとをもとひ吉野山の花
をわけ和歌の浦にさをさし難波堀江に船をうかべなどし給
ふ折ごとに世に名高うおはすれば雲の上人をはじめ知る知

〔をぢく〕條
々

らぬみやび雄たちこぞりてこゝに招きかしこに誘ひ参らす
れば何くれといとなくおはするからに心ならひて語らふ折
もなかりけりさて水無月なかば歸りなんとて

流れても淵瀬かはるな立ちかへり又もわたらん賀茂の
川なみ

と自ら盃に書きておくり給へるにいとゞあかず思ふ給へれ
ど家人たちと共に物まなぶ人どもも待酒たゞへていはひ待
ちおはすらん物をとえとゞめもやらで又も渡らんとなぐさ
めおき給へる言葉をたのみて馬のはなむけによみてまゐら
する歌

別れなば賀茂の川浪よりあひて又かたらはん時を待た
まし

練習問題

(七) さゆりなでしこ今をさかりと色を交へて露涼しげなるとり／＼いはむかたなきに夕立ひとしきりして光ぬれたる月影波に浮べるに釣殿のもとにて水鶏のうちたゞきたるが耳にさしあてたるやうなるぞ昔物語の心地していとえんにおぼえけるかし

(泊酒文藻)

(八) おほよそ人の世の中おのがじしのなりはひ暇なきものからなほその暇には何くれの心やりぐさのなくてやはあらんさるは畫書き手習ふわざを始にて小琴を遊び圍碁に伴ふたぐひをこそ古人も心ゆくものにはいひおきつれ (泊酒文藻)

(九) 縣居翁の筆のあとを見るにを、しくはたみやびたるはさるものにてわきて世にす心たかさの見ゆるところなむありけるそはおのづからのことわりにて筆のあとにこそ人々の心ぐせのあらはれてたかきもみじかきもいちじるきものなればなるべし

(泊酒筆話)

玉勝間

本居宣長の隨筆で十四卷よりなる。主として國語・國文・歌學・神道に關する考證研究と種々の感想見聞とを、流麗正雅な文章で認めたものである。

一 まことの道

道にかなはずとて世に久しくありならひつる事をはかにやめむとするはわろしたゞそのそこなひのすぢをはぶきさりてあるものはあるにてさしおきてまことの道を尋ねべきなりよろづの事をしひて道のまゝに直しおこなはむとするは中々にまことの道のこゝろにかなはざることあり

○ありならへる事

よろづの事はおこるもほろぶもさかりなるもおとろふるもみな神のみ心にしあればさらに人の力もてえうごかすべきわざにあらずまことの道の意をさとりえたらむ人はおのづからこのことわりはよく明らめしるべきなり

二 かなづかひ

假字づかひは近き世明らかになりていにしへ學びするかぎりの人は心すめればをさくあやまることなきを宣長がをしへ子どものつねに歌かきつらねて見するを見るに誤りの多かるはまたいかにぞや
そもくてにをはのとへのなどはうひまなびの力及ば

○をさく

〔正濫抄〕和字
正濫抄一僧契沖

の著
〔古言梯〕楫取
魚彦の著
○書きひがむ

○かつは

ぬふしある物なればあやまるもつみゆるさるゝをかなづかひは今は正濫抄もしは古言梯などをだに見ばむげに物しらぬわらはべもいとよくわきまふべきわざなるをなほとりはづして書きひがむるはかへすくゝいかにぞや

これはた心とゞめず又ひたぶるにまなびおやにすがりてたがへらむは直さるべしと思ひおこたりておのが力いれざるからのわざにしあればかつはにくくさへぞおぼゆるしか人にのみすがりたらむにはつひにかなづかひをしる世なく
てぞやみぬべかりける

三 かたるなかに

三 かたるなかに

○をこがまし

ことばのみにもあらずよろづのしわざにもかたみなかに
はいにしへさまのみやびたる事ののこれるたぐひ多しさを
を例のなまさかしき心ある者のたちまじりてはかへりてを
こがましくおぼえてあらたむるからいづこにもやうやうに
ふるき事のうせゆくはいとくちをしきわざなり

○はふりわざ
○とつぎわざ

はふりわざとつぎわざなどことにるなかにはふるくおも
しろきことおほしすべてかゝるたぐひの事どもをも國々の
やうを海づら山がくれの里々まであまねく尋ね聞きあつめ
て物にもしるしおかまほしきわざなり

四 ひいな

人の形をちひさく作りてわらはのもてあそぶものを物語
ぶみどもにひるなといへりこれはちひさくつくれるを鳥の
ひなになづらへていへる名にてもじも雛とかき今の世の人
もひなといふをふるくひるなとしもいへるは詩歌をしいか
四時をしいじ女房をにようばうといふたぐひにてひもじを
引いていふなれば假字はひいなと書くべきをゐと書けるは
たがへり物の雛形といふもちひさく物したるよしの名なり

五 歌よむさま

今の世にうひまなびのともがらのよみ出たる歌はきこえ
ぬところを聞ゆるさまにとりなほせば古へ人の歌ともはら
同じくなることつねにありこれさるべきことなりいかにと

○うひまなび

いふにうひまなびのほどはおほかた題をとりぬればまづ昔
のよき歌の集の中のその題のうたどもを見てその中の一つ
によりてこゝかしこすこしづゝ詞をかへてつゞりなすなら
ひなり

大かた古へ人のよき歌はその詞みかならず然いはでは
かなはぬさまにておほかた一もじを加へがたきものなるを
いまだしきものゝ心もえずこゝかしことかへぬればかへた
る所の必ずとゝのはぬわざなるゆゑに歌よく心得たる人の
見てそをとゝのふさまに引きなほせばかならずまた本の古
歌とひとしくはなるなり

○いまだし

○もはら

さてさやうに古歌ともはら同じくではあらたによめるか
ひなきやうなれどもうひまなびのほどのは後までよめるう
たかずに入るべきにもあらざればそはとてもかくてもあり
ぬべし

○おいらか

歌のさまこゝろえむまなびのためにはしばらくたゞおい
らかに上のくだりのごとしたりむぞよかるべきさるをはじ
めよりさかしだちて人のふるさぬめづらしきふしをよまむ
とせばなかゝによこさまなるあしき道にぞまどひ入りぬ
べき

○さかしだち

○よこさま

六 ある人の言

○かいつらね

櫻の花ざかりに歌よむ友だちこれかれかいつらねてそこ
かしこ見あるきけるかへさに見し花どものこと語りつゝ來
るに一人がいふやうまろは歌よまむと思ひめぐらしけるほ
どに今日の花はいかにありけむこまやかにも見ずなりぬと
いへるはをこがましきやうなれど誠は誰もさもあることと
をかしくぞ聞きし

○まろ

○さもあること

七 歌を思ふほど

歌よまむとて思ひめぐらすほど一ふし思ひえたる事のあ
るに心のごといひとゝのへがたくて時うつるまで思ひある
は日をかさねても同じすぢにかゝづらひてとかくつゞけ見
れどもつひにことゆかぬことあるものなり

○ことゆかぬ

さるをりはそのふしをばきよくすてゝさらにほかにもと
むべきわざなるをさすがにをしくすてがたくてあかずはお
ぼえながらいかゞはせむにしひてつゞり出たる心ぎたなき
わざにはあれどたれもよくあることなり

又さやうに久しく思ひわづらひたるほどにそのかゝづら
へるすぢにはあらで思ひかけぬよきことのおとかたはらよ
りいで來てたやすくよみ出らるゝ事もありかしされどそれ
も深く思ひ入りたるからさるよき事もいで來るにてはじめ
よりのいたつきのいたづらになれるにはあらずなむ

○いたつき

八 八景といふ事

○むげに
○めづ
○こちなし

世に八景といふことのこゝにもかしこにも多かるはもと
もろこし國のなにがしの八景といふをならひてさだめたる
近江八景ぞはじめなめるを又それにならひてなりけりさる
はむげに見どころもなきところをさへしひて入れなどした
るが多かるはいかにぞやまことその景をめづとならばけし
きよきかぎりをとりてこそさだむべけれその數にはさらに
かゝはるまじくいくつにてもあるべきに數をかたく守りて
かならず八つにとゝのへむとしたるこそこちなくおぼゆれ

九 京のやどり

○けはひうとし
○めうつし
○にぎはゝし
○おほさと
○ちうがはし

る所にぞ有りけるを家はやゝおくまりてなむありければ物
のけはひうとかりけれど朝のほど夕ぐれなどには門にたち
出つゝ見るに道もひろくはれくゝしきにゆきかう人しげく
いとにぎはゝしきはるなかに住みなれたるめうつしこよな
くてめさむるこゝちなむしける京といへどなべてはかくし
もあらぬをこの四條の大路などはことににぎはゝしくなむ
ありける

天の下三ところのおほさとの中に江戸大坂はあまり人の
ゆきゝ多くらうがはしきをよきほどのにぎはひにてよろづ
の社々寺々などいにしへのよしある多く思ひなしたふとく
すべて物きよらによろづの事みやびたるなど天下にすまゝ

ほしき里はさはいへど京をおきて外にはなかりけり

一〇 神の道

神の道は世にすぐれたるまことの道なりみな人しらでは
かなはぬ皇國の道なるにわづかに糸すぢばかり世にのこり
てたゞまことならぬ他の國の道々のみはびこりにはびこれ
るはいかなることにかまがつひの神のみこゝろはすべなき
物なりけり

○まがつひの神
○すべなき

菅 笠 日 記

本居宣長の吉野の花見紀行で、明和九年三月五日伊勢を
出で、同月中旬歸著せるまでの記録である。そのうち地
理歴史に關する考證には重要な記事が多い。

一 山わけ衣

ことし明和の九年といふとしいかなるよき年にかあるら
むよき人のよく見てよしといひおきける吉野の花見にと思
ひたつそもこの山分衣のあらまは二十年ばかりにも
なりぬるを春ごとにさはりのみしていたづらに心のうちに
ふりにしをさのみやはとあながちに思ひおこして出でたつ

一 山わけ衣

五

「よき人の」
よき人のよしと
よく見てよしと
いひし吉野よく
見よよき人よく
見つ(萬葉集)
○さのみやは
○あながちに

になんありける

○いそぎ

さるは何ばかり久しかるべき旅にもあらねばそのいそぎ
とて殊にするわざもなけれど心はいそがはし明日立たんと
ての日はまだつとめてより麻ぬききざみそゝくりなんどいとま
もなしその袋にかきつけける歌

うけよなほ花のにしきにあく神も心くだきし春のたむ
けは

二 いみじき雨風

こよひ雨いたくふり風はげしきに故郷のそらはさしおか
れてまづ花の梢やいかならんと吉野の山のみ夜一夜やすか

○さもあらなん

らず思ひやられていとゞ目もあはぬにこのやどのあるじに
やあらんよなかにおき出でてさもいみじき雨風かなかくて
明日はかならずはれなんといふなる聞きふせりていかでさ
もあらなんとねんじをり

○心のうら

あけがたより雨やみておき出でて見れば雲もやうくう
すらぎつゝはれぬべき空のけしきなるに家あるじの心のう
らはまさしかりけりといとうれし日頃の雨にゆくさき道い
とあしく山路にはたあなりときけば今朝はたれもたれもみ
なかごといふ物ののりてなん出でたつさるはいとあやしげ
にむつかしき物の程さへせばくてうちみじろくべくもあら
ず尻いたきに朝寒き谷風さへはしたなう吹入りていとわび

○むつかし
○みじろく
○はしたなう

○かちゆく

しけれどゆき困じたる旅ごこちにはいとようしのばれてかち行くよりはこよなくまさりて覺ゆるもあやしくなん

三 はつせ寺

さてこゝかしこ見めぐるにこの山の花大かたのさかりはやゝ過ぎにたれどなほさかりなるもところへに多かりけり巳の時とて貝ふき鐘つくなりむかし清少納言がまうでし時もにはかにこの貝を吹きいでつるにおどろきたるよしかさおける思ひ出られてそのかみの面影も見るやうなり鐘はやがてみだうのかたはら今のぼり來しくれはしの上なる櫻になんかゝれりける

名も高くはつせの寺のかねてより聞きこし音を今ぞ聞

〔清少納言が云々〕

枕草紙に「ただ
傍に貝をいと高
く俄に吹き出し
たるこそおどろ
かるれ」
○くれはし

きける
ふるき歌どもにもあまたよみけるいにしへの同じ鐘にやといとなつかし

四 多武の峯

すべてこの所みあらかのあたりはさらにもいはず僧坊のかたはら道のくまへまでさる山中におち葉のひとつだになくいとくきらゝかにはききよめたる事又たぐひあらじと見ゆ櫻は今をさかりにてこゝもかしこも白たへに咲きみちたる花の梢ところがらはましておもしろきこといはんかたなしさるはみなうつしうゑたる木どもにやあらん一やうならずくさへ見ゆそもこの山にかばかり花のおほかる事

○みあらか

○きらゝか

○くさへ

かねては聞かざりかし
谷ふかく分けいるたむの山ざくらかひある花の色を見
るかな

五 一目千本

こゝより見わたすところを一目千本とかいひて大かたよ
し野のうちにも櫻のおほかるかざりとぞいふなるげにさも
ありぬべく見ゆる所なるをたれてふをこの者かさるいやし
げなる名はつけけんといと心づきなし花は大かた盛りすぎ
て今は散り残りたる梢どもぞむらぎえたる雪のおもかげし
て所々に見えたる

○をこの者

○心づきなし

○むらぎえ

六 吉水院

九日とくおきいでてはしちかく見いだせば空はちりばか
りもくもりなくはれ渡りたるに朝日のはなやかにさし出で
たるほど木々のこのめもはるふかき山々のけしき霞だにけ
さはかゝらで物あざやかに見わたされたり吉水院はたゞは
ひわたる程にてゆきかふ人のけはひまでまぢかくめのまへ
に見ゆ

○はひわたる

七 かひ坂

雨はやみぬれどなほこゝちあしければ例のあやしきかご
といふ物にのりて飼坂をのぼるげにいとけはしき山路なり

○かちより

けりされどおのれはかちよりならねばさもしらぬをみな人のとばかりゆきては息つき立ちやすらひつゝのぼるを見るにぞくるしさ思ひやられぬるとものをのこは荷もたればにやはるかにおくれてやうくくに登りくるもつゞらをりのほどはいとまぢかくたゞこゝもとに見くだされたり

○つゞらをり

八 すがのを笠

伊勢寺をすぐるほどはや入相になりにけり供のをのこをばさきだててやりつればみな人の家よりむかへの人々なんど來あひたるうちつれて暮れはてぬる程にぞかへりつきけるかくてたひらかに物しつるはいとうれしき物から今はとてときすつる旅のよそひもひごろのなごりはたゞならず

○旅のよそひ

ぬぐもをし吉野のはなの下風にふかれきにけるすがのを笠は

よしや匂のとまらずとも後しのばん形見にもその名をだにとせめてかきとどめて菅笠の日記

練習問題

(一〇) ふりはへて訪はせ給ふみ志はさるものにて雪こそ深くはべるめれ道のほどもおぼつかなしあかりのおんまうけや候ふ參らせてむやなどきこえつゝすさよばすればねぶりゐたるが顔ふくらしあくびうちして走りくるもをかし (おもひぐき)

(一一) 軒近き吳竹の下風心もとなきほどにうちそよめきたるもあかぬ心地のみぞせらるゝやゝありて同じ心なる人又二人三人なむ來あひたるさうざうしかりつるにいと嬉しくてはかなき物語も今一際心ゆく心地す (鈴屋集)

(一二) この流につきてのぼるにはかゝしく道もなきそばづたひを辿り行けばいとどしく苦しくて足のうらうごかれずわびしきをわりなくねんじつゝ強ひて物するまゝ

に思ひもしくる菊いとしげくあるところにいたりぬ (鈴屋集)

(一三) 入方近くかすかなる光のいとあかぬ心地するに空さへ俄に曇りて山の端なら
で月も隠れいみじく暗くなりて風あらあらしく吹き來ぬるはげにさだめなきこの頃の
空のけしきかなと見るにはしたなくうちしぐれぬれば足を空に走りかへる程しとゞに
ぬれぬ (鈴屋集)

(一四) 古への歌は調をもはらとせり歌ふ物なればなりその調の大凡はのどにもあき
らにもさやにもおのがじし得たるまに／＼なるものの貫くに高く直き心をもてすその
高き中にみやびあり直き中に雄々しき心はあるなり (眞淵・にひまなび)

(一五) 山のそばちを行き／＼て初瀬ちかくなりぬればむかひの山あひよりかづらき
山うねび山などはるかに見えそめたりよその國ながらかゝる名どころは明くれ書に
も見なれ歌にもよみなれてしあればふる里人などのあへらんこちしてうちつけに
むつましく覺ゆ (菅笠日記)

年々隨筆

石原正明の隨筆である。正明は和歌文章に巧で殊に有職故實に造詣が深く冠位通考の著書がある。

一 嵐山

○かつ散る
○をかし

一年嵐山の花見に行きし事あり今日ぞさかりならむと覺ゆるほどにてかつ散るもあるに渡月橋のこなたを川沿に水上の方へ行く風さと吹きあるゝに雪かとばかり亂るゝ花戸名瀬の岩波にやがてまがひ行くなど云ひ知らずをかし

二 雪

○すさまじ

雪はいづくもくをかけたゝ海のみすさまじげなりそれも湊江の蘆すこしばかり折れ残りたるひまに泊舟二つ三つ篷いと白う見ゆるはをかし市の中は何事も目とまることなけれどたゞ雪の朝こそめずらしうをかしけれ

○あぢきなし

すべていづくも雪はけしきことに處かはりたる心地してめづらしうをかし日のさしのぼる程みな起き出でて往來さかしきまで道あしうなりぬべしいとあぢきなしとく掃き集めよ取捨てよなどいひさわぐこそ悲しけれ

三 長月なかば

長月なかばよもの草葉はやうくまれになり行く程に園

○なべて

○こちたし

の中なべて荒れまどひて人のすむべき所ともなし野といへどあげまきは分けかよふべしこゝはたゞ兎の徑すらも見えぬやこちたき葎にうづもれてさゝやかなる家たゞ一つあり

四 もみぢ

○つごもり

長月つごもり神無月ついたち山ふところすこしゆほびかなるあたりをゆくこそおもしろけれもみぢのくれなるなる黄なるこきうすきにほひある匂なきおのがさまくの情にて見所多かり又常盤木のこきみどりなるに下葉のいひしらずそめたるなどいとをかし

五 上野は

四 もみぢ 五 上野は

○しづえ

○處せう

上野は時となくよろし花の幾千本となきが常盤木に立ち
まじりたる嵐山おぼえてをかし夏はいとくしげりあひて
日かげうとくにしづえひまある方より忍ばずの池のはちす
處せう咲きみちたるがほの見ゆるに追風いと涼しうてさと
匂ひくるいとうれしもみぢの頃またいはんかたなし

六 夕と朝

○いざよふ月

ゆふべやまさりたらむ村雨なごりなく晴れ風いと涼しう
て山の端の雲いと白うわざとならずところくにかゝれる
にいざよふ月の今出づべきにやあらむにほひうつりて見ゆ
るあしたやまさりたらむ峰の松原濃きみどりなるに茜の色
燃ゆるやうにて日のなからばかりさし出でたる

七 言語の本義

すべて言語の本義はいかなることとも知りがたしそれ知
らずとも當用をだに知らば何の事もなししかるをあなたがち
に解かんとすればかならず横ざまにゆがみゆくものなりし
か知り難き事を知らんとせんよりいとよう知らるべき事の
知らであるが多かるをまづそれより學びとるべきわざなり

八 隨筆

隨筆は人の見聞く事言ひ思ふ事あだごとともまめごとともよ
りくるに隨ひて書きつくるものにしあれば常にはいとよく
知りをる事も忘れては僻事いひあさまなる考ども、立ちま

○あだごと
○まめごと
○僻事
○あさま

○えんに
○こちぐし

じり文の姿もえんにこまやかに書きとらでこちぐししく
拙き事などもありて様あしきものながらさるつくろひなき
物なるゆゑ心いき才のほど器の限も見えてなか／＼面白き
ものなり

九 櫻のさかりは

散るぞめでたしと詠みしもことわりなり櫻のさかりはた
だ二日三日ばかりあまりあへなき心地はすれど又來む春は
と心いられて待たるゝも久しからぬ故ぞかし唐桐といふ
もの葉のさま涼しげに花の色いとめでたけれど夏の半より
秋すぐるまでたゞ同じさまに咲きたるに飽きはててとく枯
れよかしとさへ思はるゝや

「散るぞめで
たき」
残りなく散るぞ
めでたき櫻花あ
りて世の中はて
のうければ
○心いられ

一〇 學の道

學の道にこゝろざす人は古より今に變り來し有様をよく
知りえむと心がくべきわざなり古の事今より見てはいと思
の外に異なるふしあるものにて事によりてはその移り來し
ことわりわかぬもあり

さるをたゞひたぶるに文のうはべと今の世のさまとを思
ひ合せて大方にのみ心得てはかすめる夜半の月見るやう
にていとおぼくしきものなりそを明らめむには廣く書を
讀みおのが考をもよく定めてはなしえぬことにていと難き
わざにしあれど物學ばむとするものは常にその變り來しさ

○おぼくし

まをよく明らめむと心がくべきものぞかし

一一 梅の花

梅の花いとめでたし香はもとよりいはむ方なし色も羅浮
のをとめの月のもとに立てりけむ昔おぼえて艶にやさし大
方世の人は櫻をのみめでたきものにするそれまことにめで
たけれど桃海棠など及ばずとも傍ある心地するにこれは異
木の冬籠りたる中に匂いところなくて氷のひまより打出づ
る波ならで立ちならぶ花もなきは心とかりけりと思はるゝ
がをかしきなり

〔羅浮のをと
め〕
隋の趙師雄が故
事「籠城録」

○氷のひま

○心とかり

藤 簞 册 子

上田秋成の歌文集で全六巻と附録からなり、門人の分類
輯録にかゝるもの。一、二巻は和歌で三巻以下は文集で
ある。秋成は常に草稿を藤簞函に入れて置いたのでこ
の書名がある。

一 城崎の旅

秋の山見とにはあらでこの三年が程足曳のやまひにかゝ
づらひて世のわたらひも何もはかくしからぬを昔は但馬
の城崎のいで湯にしるし見しかばこたびもまた思し立てる
をしりに立ちてくる人も年頃ふかうそみし事あればともに

○世のわたらひ

○はゝそば

とてはゝそばの仰のまゝに召連るゝなりけり

○ゆくりなく

長月十日あまり二日といふ日かど出す親しき友垣の許より明日なんと聞え給ふにぞゆくりなくも思ひたまふる玉鉾の道もたえくゝにとか覺束なささへそひて胸つぶるゝぞわりなき

朝なゆふな馴れにし君が出ててゆかば何わざをして月日過さん

○いたはり

秋風もいたう身にしむ頃にして侍ればいとよういたはりて何事もなく彼處にいたり給ひねこのあつごえたるものいとあらくしげなれど山里の朝宵しのがせ給はんにはとて

○なごやか

なんと聞えしに情ある人のこゝろをつくし綿身にそへゆかば寒けくもなし

住吉の里にやどりぬ須磨の浦傳ひする今日は海の面なごやかに百船のゆきかひ荊菰のうち亂れつゝ渚には釣ほこりて遊ぶを見ればこの磯山松の色も人々の眼もひとつ縁なるさえある人も口とづるわたりをまいて打出づべうもあらず

大藏谷といふ所にやどる今宵なん世こぞりて月見る夜なる所がらたゞにやあらんとて江邊に出でたれば月花やかにさし出でて風波いさゝかも立たずさすがに海の面は青鈍の

○あはと見なが
ら

衣着たるにはかの這ひ渡る程といへどこしかたは夜ぎり立
ちこめて見えぬあはと見ながらも淡路の島はたゞさし向ひ
てかち路やあると思ふばかりなり

○かたわ者
○あらがふ

こよひ豆崎の宿にて夜べの濱風名残なやましきに此の家
の總角がかたわ者と何事をかあらがひて聲高なる程に鄰む
かひなるも出て来て口々なるは雨蛙のやうにてあはれ互に
疵つきやすと心ならねどあつかひわざも由なければさうじ
引きたてゝ籠りをりいつしか心の限りいひ果てて別れく
に打ちしづまりぬ

○あつかひわざ

城崎に来て見ればやどりは昔ながらにてもと見し人はあ

○およすげ

らずたま〜君われを忘れずやと云ふを見ればむかしの人
なり髪髭まだらなる翁のかなたよりも我をいかにあさまし
と見るらんあるじと云ふもあげまきなりし人の今はおよす
げて昔物語などす

〔夜には九夜〕
にひばり筑波を
すぎて幾夜かね
つるかゝなべて
夜には九夜日に
は十日を(古事
記)

雨は時じくにふりて日數へにけり今日いくかぞと問へば
夜には九夜といふ山おろしの梢吹きならしつゝおどろおど
ろしく幾夜ねざめがちなりはゝそばのいかにさうくしく
やおぼすらむかう捨て奉りて來ぬる罪かしこし

彼方にも山里いかに佗しからんなど思ひおこせ給ふべし
いとかたじけなきことをこゝなる人となげくこの人もうち

ながめつゝ

なかぞらの雲のまよひにたぐへつゝたびねの袖は時雨

ひまなき

とぞかこつ冬はまだきに霞のたし／＼と音していたら寒し
夜べはみぞれなどふりたるといふ物の音も聞きわくべから
ぬ宿なりけり

○かこつ

○さうどき

五日といふあしたからうじて日のさし出でたるを影忘れ
し人々立ちさうどきつゝ山によぢて岡見やせんといふ河邊
に釣や垂れましといふ心々に定めかねつるを荒磯の小貝ひ
ろはんと云ふに皆かたまけていでたつ

○かたまけ

〔雪のしら濱〕

かきくらしふれ
ど波にはかつ消
えて積れる方や
雪の白濱

限りもなくひろき海の雲と浪のけぢめも見えぬ濱邊に來
たるはやくの人の雪のしら濱とよみし所と聞ゆげにもまさ
ごはそれが降りつみたるやうになん里人は高野の濱とよべ
り今日はのどかにて海はたひらかなりと云ふもよせる浪
は山もこゝに動きくる様なりかゝるさかひは見ぬ人のみに
てたゞあきれにあきれで打望めり

○たぐへゆく

○檜わりご

白き帆あまた見ゆこれ見るがうちに千里や行く雲に入る
と見れば又追ひくるが見ゆ心魂も空にたぐへゆくかとおも
ほゆ浦の神の丘にのぼりて檜わりご小がめ取りちらして遊
ぶこゝよする浪はたゞこゝもとに打ちかけらるゝ心地す餘
りのおそろしさに氣のぼりて物もいはず

天の原やへのしほぢを吹きこしてなごろ高野のはまの
ゆふ風

十六夜の月いとよくみが、れ出でたり親のたまへりし日
數今はみちぬればなほやましさの名残あるにも明日なん立
出づべきにて宿のわかれさへ今更に覺えて夜ふくるまで月
をながめをり

つとめて宿を出づ雨もひまある空なり久美の入江に來た
るいとおもしろき所なりれいの物おぢする人あはれがるは
波てふ物の聊かも立たぬがうらやましとや蟹舟二人して漕
出づとてあなうたてあの雲なんたゞ今降りくあはれ宿世な

○物おぢ

○わびごと

き生業かなとわびごとすと聞きてこの心よわき人の
見るめにもまづぞ涙はさしぐみの入江にぬるゝ蟹なら
ぬ袖

二落葉

いにしへより春秋に心々なることを争ひざまに言へるな
んいともはかなけれ折につけ事に臨みては常あるべきこと
かは我は春のあした秋の夕にまされりといひし人はそらに
飛びたつ蘆たづの正目のどけく歌ごゝろをさへいざなふよ
と見しなげきなり

花もひとつに霞まれてと詠みて秋の月めづる人々にむか

○正目
○なげき
〔花もひとつ
に〕
あさみどり花も
ひとつにかすみ
つつ臙に見ゆる
春の夜の月（新
古今集）

「秋山ぞわれは」

額田女王の歌
(萬葉集卷一)
○こめいたる
○すぐくし

ひしは女々しからぬまけじ心のおどろかるゝなりき秋山ぞ
我はといひしをこそひたぶるにこめいたるさがと覺さるゝ
なれ又何某のおとゞの事よくすかい給へるをばすぐくし
き操もてつよく綱ひかせたまひしこや秋に打ちしづもりま
せる賢さよ

三 雨のさまぐ

木の芽春雨けふいく日ふり次ぎて野は古草に新草まじり
て萌出づれば四つの澤水もやゝ満ちぬべし三吉野の花にと
て旅たつ人のあまぎぬ打ちかづきて散りや過ぎなんと心あ
わたゞしくわけ登るぞわりなき

○さうどく
○ともの宮つこ
○くまぐ

風さと吹きくる跡より黒き雲の追ひしきて降りくる村雨
は瓶にたゝへし水をくつがへすが如くに御格子おろせ簾よ
など立ちさうどきつゝ見たまへれば大庭のしらまなどは忽
ち浅川の瀬に流れあひて殿守のとももの宮つこらこゝかしこ
の御垣のくまぐに這ひかくるゝなどめざましや

○はらめる心
○つれなし
○思ひきゆ

風は野分こそかなしけれながめと降りかへてはいとさう
ぐしき秋になん八月十日あまりの空の雲のまよひ人の心
をなやましうするよ文つくり歌よむ人のはらめる心をたが
へ酒くみ舞ひあそばんのをかし業も空しからめ望の夜の更
行くまでも軒の雫のつれなく音するは誰もく思ひきゆら
んかし

○時じく

神無月の雲のけしき宮古も田舎もおなじ様にはるゝ日なきはこれや時じく雨のよしなるをその頃すぎにてはみぞれとふり雪あられとこりて枕をおどろかし窓のもとに夜更くるまで文よむ人の心すさびをもよほすなんいとあはれとおぼゆる

○心すさび

○さへられ

雨をなつかしきものにするは家富み人多くもたりて賑はしきあたりにも友垣のとひくる道を絶え家の業などもさへられて宿にのみこもりをり文を讀みてはいにしへをしのび鳥の跡はかなう書きすさび或はいつきむすめに琴かきならさせ酒あたたため佳物とりなめて日ねもす夜すがらならむいとたのしき

○日ねもす夜すがら

○打ちうめき

あしたよりおきいでゝ夕暮すぐるまでも立走りてもたつる煙たえゝに人の情をだにうくる由なき者等はたゞ打ちうめきてつら杖つきてつれなしやこの雨とながめたらむいとはかなし

四年木

あらたまの年を送り迎ふるわざこそ千年のいにしへ今のうつゝ人も變らぬ喜びはすなりけれ春のまうけつかさゝの衣はかまの色あひゆほびかに新ならんがめでたし民草もおのがほどゝにつけて染めぬひするめでたし貧しきは解き洗ひ調ずる急ぎの哀ながらそもよろこびする心ばへなん

○うつゝ人
○つかさ

○おろそげ

おろそげならずめでたし

〔蜀の山元たらん〕

〔蜀山元、阿房出。〕（杜牧之、阿房宮賦）

米積みはえもちひ白づき海のもの山のもの何くれと送り
かはすあかずたのしきおはら賤原大江山生野の道を都にか
づき持てはこぶ年木のにぎはしきを見れば蜀の山元たらん
といひしをさへおぼゆるかし

五 初 秋

○文月

〔月は流を云々〕

石川や瀬見の小川の清ければ月も流をたづねてやすむ（新古今）

月あかき夜誰かはめでざらむ文月望のこよひ庵を出て、
わづかに杖をひけば鴨の河面なり雨降らぬほどなれば月は
流を尋ねてやすむらん音をしるべにとめくればむべも清し
とて人々手にむすびかいそゝぶりなどして遊ぶ

〔竹の中より云々〕

竹取物語のかぐや姫

○貌よ人

風高く吹き雲消え影さやかにて何をか思ふくまもあるべ
き月見ればすゝろに物の悲しきぞとは竹の中より生れ出て
し貌よ人の天にいまやの別をしむこそ泉漲れども煮るべき
物も持たらず酒もとむる家もちかゝらずとてたゞさし仰ぎ
て語りことすとはなしに大方の人は古の跡につきて八月の
こよひ文作り歌よみ杯の流のまゝに遊ぶよ

○思ひたのめ

さはをかしき一節をはらみなしては夜よしとのみ思ひた
のめしにあしたより雲立ちまよひ野分たつ物の音して村雨
さとふり通りし跡の雲まよりさし出でたる面輪うれしけれ
どさすがに思ふに違ふ事のあるにはとばかり眺めすてゝさ

しこめし閨戸のすきまより物にさはらでさし入りたる光は
目さめ心もすむらむかし

〔都府樓云々〕
菅原道真をいふ

○落ちはぶれ

○あなづらし

都府樓近きにも垂籠めていませし君こそは月をかなしき
ものと打守り給ふらめ老が家をうしなひ人をもさきだて世
に落ちはぶれよろほひつゝ命生きたらんをしばしにてもと
いふ人々に扶けられて女々しくあなづらしき身の月見て遊
ぶは何心ぞや

六 中秋

八月十日まり五日あしたより空いとよう晴れたり故郷人
誰かれこよひ月見んと云ひ語らふ野や分けまし棹やとらせ

○ともし

○漕ぎそげ

んといふ翁今は都住して野山の秋ともしくもあらしみをつ
くしの邊まで漕ぎせんにはとて軽らかなる舟もとめて酒よ
き物などはとゝのへたるべし五百津舟つどふ中を漕ぎそげ
て河尻に漂ひ出でぬ

月はやく生駒根にさゝげ出でたれば夕潮満ちたゝへ風そ
よめくにぞ蘆の浦わきたなくもあらず武庫の高嶺に入日の
にほひ残りて西の海はろくゝと見わたさるゝ帆手打ちつれ
て入來る大船いさりすとやこぎ出づるちひさき舟秋の木の
葉のみだれに散りうきたり鴉の何處にかやどりさだめて飛
びかへる空鷗のあさりすとおりぬる渚さしくる湖の波がし
らに躍る魚の光は昔もあまたたび見しをこの夕あそびそむ

る心地せられていともたのし

○栲ひれ

月はいと花やかに澄みわたるほど宮人のかくる栲たひれば
かりの雲もなびかず星の林のみぢもこよひの光にはまけ
たりな風いさゝか吹きいでて波のあやいとよう見極めらる
暮れはてぬればめぐれる山はをぐらうなりて淡路さすがに
見えずなりぬ

○あひなの言
〔洞庭〕 湖南省
〔西湖〕 江蘇省
にあり

友垣一人が云ふこよひの遊誰々も心くまなくこそおはす
らめ唐歌やまとうたきたなげなりとも打ちうめき出でばや
翁先づよめといふあひなの言や昔貫之躬恒にあらずば今夜
の影に光あらそふべきかは洞庭西湖にこがれ出でたらむ棹

○面ふせ

の歌も酔のすゝみにこそほこりかにも打出づべけれ翁が木
の芽煎てはかなうすさめるこゝろに何事かまねび出でん舟
のよそめばかりに歌や文やはかなう遊ぶらんと見おこせた
らんを譽にしてやみなましこのさしあふげる影にも面ふせ
つべき業なりや

○引きはへ

月は中空にかゞやきてあか／＼と澄みわたりて常世のま
らうどのかり／＼と鳴きて來たるぞ珍らしな海の色は青に
びのきぬ引きはへたらんごとにさすがに風冷かなれば衣か
さましといふべき人もなきわたりに飲みほしくひみちてす
ゝろ寒しなかへらやと舟ばたをたゞきて楫とりにも歌へと
いふかれも酔ひたれば棹の歌をかしげにうたふ須磨よりや

○丑みつ

明石よりや吹く西の風にいざなはれて漕ぎもて歸るほどに
夜は丑みつ許にやなりぬらんと言ふ

七 聽雪 其一

あはれく老いたる人ばかり見ぐるしく口惜しきものは
あらぬ昔は都邊の雪いかならんと風だにさむく雲の立ちま
ふ夕は出でや立たましなど思ひを動かせしにそれさること
にてこの四年ばかりいにしへこの宿もとめて住みつきぬ
る時まで陸月その日雪いとふかう降りつみたるを待ち
よろこべる友どち二人みたり搔いつらねて消えがてまでも
野山にまじりしはたゞきのふの如わすれぬをかうもおとろ
へけりな

○消えがて

○繰言す

今は目こそ疎けれ足こそなえたれこの降る雪に物ばかり
言はんとて紙すゞりとう出たれど指は龜のごとかゞまりて
筆あゆますべくもあらねばおき火かいまさぐりつゝこしか
たを忍び今を打ちなげきては例の繰言すなんいとかなしや
神無月時雨の雨に染めし木末の散りはて、後は野山は色
なくなりてん高きいやしきおのが程々に冬ごもりして春を
待つこそわりなけれ

あしたより雲けしきだち嵐はげしきにやれたる窓の紙は
風をすゝりていといたう寒きに夕づけて雪やもよほす物の

音ふつに絶えたりしにたゞしとくくと鬼のあゆみくる音するは雪かみぞれかと這ひ出でて北の窓すこし明けて見たればほどなき庭をさしおほふ鄰の松が枝の葉にいとしろう降りつみたるを見るにもいदैいかで出でやたゞまし

○機ばり
比枝比良に立ちつらなる山々高きは雲にかしらつき入れ低きは物につままれたる様してよそほひ立ちゑめるが如く妬めるに似てわれ天の下のかほよ人とや打ちほこりたらん野はもろこし人の白銀を布くと見しはなほ曇りげなり神の織りけん栲の白布を幾千々むら引きみだりたりと見ばそも機ばりのけぢめ見ゆべし林は賢木葉さかきに木綿ゆふとりかけて神のいでましの御前にさゞげ出でたつとも譬ふべし

○すのこ
○ひたやごもり

や、光をのこして暮れはてぬと見るく空晴れ風すこし吹きて雁がねの鳴きてわたるほどに月や出でぬとすのこに立ちいでて見ればはやく山の端をはなれて晝よりもげにあかくしらしく星のかゞやきそへて千里の外までもいささけの隅もあらじと思ふはかくひたやごもりして閉ぢたる眼にさへまさめのけしきして心なぐさむなんいとあやしき

八 聽雪 其二

雁がねの故郷としも云ふめる越の國々はや冬の雪の山とふりつみいはほと凝り深き谷は丘となり高き木末も道の芝草と埋もれ或は崩れなだれて旅行く人の關路となりて老い

「あはになふりそ」
降る雪はあはになふりそなよばりのあがひの岡のせきならなくに(萬葉集)

○端山

○はたつ物

○しがらみ

○きはくし

○しらしらし

たる駒さへさす方をうしなふさるわたりならぬにさへあはになふりそといにしへ人のなげきしはこれが煩すなりけり
都べの雪は時雨ふる神無月過ぎて風ひやゝかに雲がちなるには朝よひとなく照日ながらに散りかひて衣寒しもといひつゝも立出で見れば高山端山なべて赤はだかに見るめなく野ははたつ物こそあれ下紅葉せし小草も枯れはてゝ霜に碎かれ風の塵とゆく方なく吹きまよひいは橋ふみこゆる山川の瀬も薄ら氷とづるほかはさゝやかにだに音もせず野路の小川のさゝれもしがらみも風に吹きかはかされて池沼は忘れ水とや見すぐすべきさはこゝを瀬ときはくしくあめにみちつちを覆ひて降りつむながめのしらしらしさよ

○まろうどさね

○ゑみをひらき

○わやくし

雪よく冬をおのが時とはすれど大かたの年のなみを見るに陸月立ちて望の日ごろまでにこそ一さか足らず降りつみてあな面白のながめはあんなれ冬をおのが時とすれど春はおのれまろうどさねに心ゆくあそびするか

陸月立ちなほ吹く風は寒きにも日の影うらくと山の南おもてに霞たな引きそめて去年よりふみし梅のゑみをひらき鶯の初音さゝやかならず軒におとづれて芽はる柳の枝は空に動くけしきなん見ゆ

さるは人の心もゆたけく高き卑しきるやくしく喜びを

のべつ、疎きもいきかひしてことなきを祝ふたのしきよ唐
うたやまと歌道々しげに絲竹の遊びも何も春をまづことぶ
くなん年のはにあかぬためしなりける

九 故郷

むかし人も世に合へるあり時を失へるありその跡いとも
多かめるを更にかぞへあげんが煩はしき世にあへるが賢き
にもあらず時を失へるが愚なるにもあらず身の幸のおくれ
さいだちあひ遇はぬにこそあらめ

中々に昔の田舎の住ひこそしのばしけれさきのほまれ後
のそしりもあな煩はし只うまれたる程々に寒からずほしか

〔すまで哀を〕
山ふかくきこそ
心はかよふとも
すまで哀はしら
んものかは(兼
好)

練習問題

らずばひとの國故郷のけぢめもあらじかの谷ふかきところ
の有様いきて見るともすまで哀をしらんやは

(一六) あかつきは春こそわきて峯の松のひまふ、あかねさし横雲かゝれるあしたは
えもいはずにほひやかなり風さと吹きて花の香おくりくるそなたを見れば鶯の舌とく
鳴きて枝うつりするさまもうれしげなり (つゝらぶみ)

(一七) 鶯の宿春かけてしめしもやう／＼あれゆくまゝに梢にしほみ木ごとに散りこ
ぼるゝもかばかりにははしきは雪に氷に寒き嵐をもたえしのぶがこと木にすぐれたれ
ばなりけり如月立ちて水の鏡をくもらせては老をかくさふとするよ (つゝらぶみ)

(一八) 青々たる春の柳家園に種うることなかれ交は輕薄の人と結ぶことなかれ楊柳
茂りやすくとも秋の初風の吹くにたへめや輕薄の人は交りやすくして又速かなり楊柳
いくたび春に染むれど輕薄の人は絶えて訪ふ日なし (雨月物語)

(一九) 菅の根の長き春日山鳥の尾のながくしてふ秋の夜もひと日ひと夜の名だてにして過ぎ行く月日はいとまなかりけり春霞かすみていにし雁の聲は耳底に残りて昨日かとおもほゆるに今日は霧のまがひに木々の紅葉を慕ひて落ち來る聲するは待つ人にしもあらぬものからいとめづらしくなむ (秋成遺文)

(二〇) 雨ははるさめぞおもしろといふ花の父母のやうに言へどうたて嵐のさそふ散りがたには何とかいふ蛙の妻よぶと聞く人もありしがおほかたは雨もよの聲とて衣と洗ふをとめらが憎しとらめらるるものを澤田に水たくはへまくする里々にはかしましともいはで (つゞらぶみ)

(二一) 妻涙をとめて一たび離れまゐらせて後たのむの秋よりさきに恐しき世の中となりて里人は皆家を捨てて海に漂ひ山にこもればたま／＼に残りたる人は多く虎狼の心ありてかく寡となりしをたよりよしとや言を巧にいざなへと玉と碎けても瓦の全きにはならじものをと幾度かからき目をしのびぬ (雨月物語)

待問雜記

橘守部の隨筆で上下と後編から成る。若人達に問はれるまゝに衣食住より所世上の諸心得を諭した單篇集である。

一世のなりはひ

世のなりはひはもとよりおの／＼わが身のためにいとなむわぎなれど身のためになすと思ふ時はおのづから私事いで人の心よせを失ひ思はくをそこなふ事もありぬべければおなじ事もひとの爲にしてわれはまた世人に養はれんと心得べきなり

○心よせ

二 人のあるじ

人あまた使はんあるじは常に私の心を用ひずそのつかふものをあげ用ふるにも懲しいましむるにも自ら人を知る心は心としてもろくの心をとひきゝひたすら賞罰を正しくすべきなりさらではよく勉めいそしむものどもたのみなく思ひてまつろはずまして依怙のさたを用るむ時はさかしき者はみな離れおろかなるものゝみ残りにとゞまりて家の衰となりぬべきなり

○まつろはず

○しかすがに

何わざにまれ人にさせてよそながら見る時はもどかしきこゝちすめれど自らすればしかすがにおもふやうにもなし

がたきものなりすべての事自らするは難く人にさせてそのうへ足らはざるをいふは易しさを人を使ふあるじの心には使はるゝものは愚にのみおもはれてこの思ひやりなきが多かるはわりなきわざならずや

三 まらうどは

まらうどをもてなすには來し時より歸る時を篤くすべしはじめづらしき心すさびにもてはやすとも日にそへておろそかになりゆきなばはじめのもてなし徒ら事となるのみならずその人家にかへりて後もはじめのよかりしはいつしかわすれてをはりのあしかりし事のみ心にのこるものなり

○心すさび

三 まらうどは

二三

四 今はのきは

人は高きもみじかきも今はのきはとなりては何事ありとも今はこれまでと清くおもひすてゝいさゝかも世に心を遺すまじき事なりをしさほしさいとほしさかなしさなどもたゞ幸くて世にあるほどのこと世のことわりうつせみのはかなきありさまなど豫てより悟りおきてつひにゆくべき時とならばうしろやすくおだしくおもひはなれて世を去るべきわざなり

○うしろやすし
○おだし

五 家居は

さるべきほどの人も家居は物好みなく庭は作りすぎず住

みなすこそたのしけれまして道に心ざしものなど學ぶらん人は家居はわろく物に拘らず見えなんぞゆかしかるべきたとひ時にあひ世に用ひらるゝ人なりとも家を見がくより身をこそはみがくべけれ

六 歌にまれ

歌にまれ書にまれわが目にわれとひとしなみによむらんと見ゆる人はいつもわれよりはるかにまさるものなりわれよりおとれりで見ゆる人もなほおとらぬぞおほきこれおのづからの人情にてかやうに互に他のうへは見おとさるゝものなればようせずば詞も過しおもひ上りもすべきわざなり

○ひとしなみ

○見おとす

○おもひあがる

七 人の物語

○あはつか
○おちこぬ事
○めやすし

人の物語をきく時あまりいらへをはやくしてうはの空にはうべなふまじきわざなり語る人もかたりちからなくあはつかにて見にくしおちこぬ事ははらによくあぢはへておちてのちにいらへするこそめやすけれ

八 消息は

○一きざみ
○わやまふ

人の許に消息せんにはよのつねに口づからいはんよりは今一きざみも二きざみもわやまひ増して言もひかへめに詞もやはらかにかくべきわざなり書もていふことはつよく甚しく聞えていたく心に障る事もあるものなりそれも暑さ寒

○言どひ

さの言どひこそあれ世の中の何くれの事わが身人の身にかゝはりつる事などにはよく心してかくべきなり

九 心高く見ゆるは

○せ

なか／＼にたのもしく心高く見ゆるものはあてなる男のみにくき女をめにもちてあはれがるとかほよき女のいやしき男をせにもちてわやまふとなりよそながら見ゆるゝにもその人の心のほどたのもしくおもはれてしる人にさへならまほしきこゝちなむせらるる

一〇 望事は

○うちぎき

人は望事なしといへばうちぎゝ心清きやうにきこえんと

九 心高く見ゆるは 一〇 望事は

○生きのかぎり

て常に足る事をしるなどいひて望事の多かるを恥づる人もあれどまことは望事のある人こそたのもしけれおのがじし務むらん家のわざはもとよりにて何事にもわが好むすぢは生きのかぎりおもひ望みて心を撓ますまじきなり

練習問題

(二二) 人は若きより身を落しくだしてからきめをみるにはしかじためしに申すもかしけれど大國主の命いみじき憂きせに落ち給ひてしばしば苦しみ給ひつるが終に大なるいさををたてさせ給へる事さへ思ひあはされぬされば今の世にもまのあたりうき身よりこそなりたつ人の多かりけれ (待問雜記)

(二三) やよひの空はなごやかに霞にほひて桃さくらさきみだれ柳のいとうちなびきこゝかしこにわかなつむなど野山にわくる身のいとなきころほひなり女のわらはのひひなかしづきもてさわぐもらうたしをのこさへさゝやかなるてうどはなほえまほしき心ちのせらるゝものなり (橋守部)

(二四) 人はまめにじちやうなるのみにてもきすぐにてかたゆきなりなべての草木を見るに花も咲き實もむすび香にもほひもみちもしておのがじし人のあはれをやどすなり人も大かた花實をかねそなへたる中に心かろく香にもほひ色めく所もくはへまほしきわざにこそ (待問雜記)

(二五) 鶯のまだ片なりなるうひごゑにほひ出せるより笠にぬふてふ花のかをり満てる枝に來りつゝほこりにさへづるはめでたきものから雲にたぐへし櫻も散りすぎて青葉しげき木の間を立ちくく聲のむくつけきには待たるゝ物はといひしに行きたがへてぞおぼゆるかし (うけらが花)

(二六) 人のしるしおけるふみなどをそのきずをもとめいでゝそしりおとしめわがさかしさを人にほこらむとかまふることは世のえせものゝ癖にてその人の名高きがねたさにあながちにまけじとするわざなればしひごとのおほかるならひにて人をあばきいはむとてかへりてわが名をくたす類もおほかめり (琴後集)

(二七) よろづのこといとはかなき業にても物の上手はおのづからに高き心しらひあ

るものにてなま／＼の人はかへりて疑ふふしありそのまだしき際の人にはとみにわきまへがたからむこそまことのいたり深きにはあなれ (琴後集)

(二八) たるを知るといふはもろこし人のつねにいみじきわざにすめることなるをまことにしか思ひとらばほどほどにつけて誰も誰も心はいと安かりぬべししかはあれど高きみじかき程々にのぞみねがふ事のつきせぬぞ人のまごころにて今はたりぬとおぼゆるよはなきものなるを (玉かつま)

(二九) そもそも近き世の人のものせることは古にあへりやたがへりやよく考へよきあしきをよくわきまへてこそならひとるべきわざなるにさる心もなくみだりにひたぶるにならひてものするからよからぬ詞えもいはぬひがごとども世にあまねくひろごりてさだまれることのごとなれるはいとかたはらいたきわざになむありける (玉かつま)

(三〇) 時ありとてや梢より心かろく散るもみちばの庭にうちつもればこがらしの風は梢にこゑたてて庭の落葉のいまさら時めきがほにまひつさわぎつ音たつるもいとらうがはしかの世捨人のいまさら又人まじはりなすにたとへつべし (花月草紙)

(三一) 人のうへたるものの心得べき古歌をと望みしものにいかばかりかありなむ今胸にうかびしとて「心ひくかたばかりにてなべて世の人のなさけのある人ぞなき」といふを書きてものしたりとなりことばそふるまでもあらずといとをかし (花月草紙)

(三二) 春くれば咲かざりし木草の花もまた咲き出づる中にそれかれとかすまへいふかざりは更なり名も知らぬもをかしう見ゆるは折からなめりあるはいとよく晴れたる朝日ののどかなる影ににはひあひて一際うつくしうあるは霞める月の影の心にくきにほの／＼見ゆるがいひしらぬなどあだし時にかゝらむやは (松屋文集)

(三三) 櫻の日比またせてやう／＼咲けるがあくまで見る程もなく疾く散るは又うらめし「よしさらば散るまでは見じ山櫻花のさかりをおもかげにして」と古の人のよみけんも後の思出にせんとにや情ふかし (益軒・樂訓)

(三四) 旅のおくりとてしたしき人のあまた湖にかけ見ゆる限りはと聞えさするをさのみやはとかくいひこしらへ袂をわかつて漕ぎゆくに來しかたもうみづらも霞みわたりて春の名残もけふばかりと思へば鳥の聲梢の色もなべてならぬあはれを添へたり

(諸九・秋風の記)

(三五) 遠き世の書を見るほどにわれもその世にあるこゝちしてやがてその人々を友となしてうち語らふこちさへせらるるをわれも筆とりてよしなしごとども書きつくるがたま／＼散りぼひのこりて後の世に傳はらば今の昔を見るが如く後の人はたわれを友とせむにはちとせの末にさへ知る人あるこちしていとをかしくなむおぼゆる

(樞園文集)

(三六) 花鳥に心をなぐさめ月雪に思をやるは世ばなれたる所こそ物にまぎれずあはれも深くおぼゆるをさりとてあまり山深きわたりは世にあとたえたる人こそあらめをり／＼ものし遊ばむには道のゆきかひ苦しくこそあらめ (樞園文集)

新近世雅文鈔 終り

昭和十二年三月二十五日印刷

新近世雅文鈔

昭和十二年四月十日發行

定價金五拾錢

著作
所
有

編纂者

合資
社

東京

修文館

代表者 鈴木金之助

印刷者

精興社

東京市神田區錦町三丁目十一番地

代表者 白井赫太郎

發行者

合資
社

東京

修文館

代表者 鈴木金之助

發行者

株式
會社

大阪

修文館

代表者 鈴木常松

發行所

東京市神田區神保町一丁目二十五番地
振替口座(東京一六四四番)
大阪市東區博勞町五丁目五十六番地
振替口座(大阪四七一番)

合資株式會社
東京修文館
株式會社
大阪修文館

372
439

終